国立歴史民俗博物館蔵田中本室町期歌会資料四点―釈文・略解題―

石澤一志＊・酒井茂幸＊＊・武井和人＊＊＊・日高愛子＊＊＊＊

【緒言】

小論の目的は、未刊・未整理のまま残されてゐる多く室町期歌会資料（及びそれに関連するもの）の内、国立歴史民俗博物館蔵田中本から、現在に至るまで全文の釈文が公にされてゐない四点の歌会資料について、釈文を提供することにある。

各歌会資料に関する本格的な考証は、あげて、今後の課題としたい。

底本とした伝本は、国立歴史民俗博物館蔵田中本の以下の四点である。

1享徳三年御会懐紙写〔Ｈ－七四三－一七〕（武井）

2続十首和歌〔Ｈ－七四三－一〇九〕（酒井）

3天文廿三年御会始〔Ｈ－七四三－三三一〕（日高）

4天文廿四年御会〔Ｈ－七四三－三三二〕（石澤）

（　）は礎稿作成担当者。なほ、礎稿は相互に検討してゐる。底本の書誌については、**【略解題】**を参照されたい。

＊いしざわ・かずし、鶴見大学等非常勤講師、中世和歌
＊＊さかい・しげゆき、埼玉大学非常勤講師、中近世和歌
＊＊＊たけい・かずと、埼玉大学人文社会科学研究科教授、日本古典籍学
＊＊＊＊ひだか・あいこ　志學館大学人間関係学部講師、中近世和歌

釈文作成にあたり、以下の方針に従つた。

(1)漢字は原則として通行の字体に統一した。

(2)1享徳三年御会懐紙写は万葉仮名書で書写されてゐるが、これも通行の平仮名に統一した。

(3)丁移りを、」一・」一一の如く示した。

(4)上句と下句の間に、一字分空白を挿入した（1享徳三年御会懐紙写を除く）。

(5)底本において一首二行書の場合も、一行書に統一した（1享徳三年御会懐紙写を除く）。

本研究は、ＪＳＰＳ科研費　ＪＰ２６３７０２００、ＪＰ１７Ｋ０２４０７の助成を受けたものである。

（武井和人）

1 享徳三年御会懐紙写

〔国立歴史民俗博物館蔵田中本『享徳三年御会懐紙写』（H－七四三－一七）〕

＊下段ニ宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『禁中御会和歌』〔五〇一・三三六〕所収本トノ異同ヲ掲出シタ。

享徳三年　御会
懐紙写（外題）

詠竹不改色　　倭哥

くれたけのさ枝に
しるしわか友の八百
よろつ代もおなしみ
とりは
一尺二寸九分
夏日同詠竹不改色　　和謌

式部卿貞常親王

ちきれなをおなしと
きはのかけたかき君
と竹との千世のゆ
くすゑ」一
夏日詠竹不改色　　和歌

准三宮兼良

君かためうへても
しるく河たけの千
いろに千代の色そこ
もれる
夏日詠竹不改色　　和歌

関白持通

葉かへせぬいく千と
せをかくれ竹のな
お此君と代はなひ
きつゝ」二
夏日同詠竹不改色　　和歌

従一位藤原公保

とことはの色にな
れつゝ君のみそみ
きりの竹の万代
までに
夏日同詠竹不改色　　和謌

従一位藤原実量

いろかへぬみとりを
友ときみもなをいち（ママ）
よやちきる竹のう
てなに」三
夏日同詠竹不改色　　和謌

従二位藤原資任

○享徳三年御会－内裏享徳三
○懐紙写－ナシ
○和謌－和哥
○ナシ－一尺三寸一分（「夏」字鼇頭、以下同）
○和歌－和哥
○ナシ－一尺二寸九分
○和歌－和哥
○ナシ－一尺三寸二分
○和歌－和哥
○ナシ－一尺三寸二分
○和謌－和哥
○いちよ－八千世
○以下、義政→実雅→資任→公綱→雅親→勝光…ト配列サル
○ナシ－一尺二寸八分

かそへつゝきみそ
見るへき色かへぬ
竹には千世のいくかへ
りとも
夏日同詠竹不改色
和謌
権大納言藤原公綱
陰たかきみかきの
内に千代こめてかは
らぬ竹のみとりひ
さしも」四
夏日同詠竹不改色
和謌
権大納言源義政
百しきやみかきの
竹の世ゝへてもかは
らぬいろは君のみ
そ見む
夏日同詠竹不改色
和哥
大宰権帥藤原実雅
いろかへぬみかきの
竹の君か代にあへ
るときはのかけやそ
ふらむ」五

○和謌―和哥
○ナシ―一尺二寸八分
○和謌―和哥
○ナシ―一尺二寸九分
○和謌―和謌
○義政―義―政

夏日同詠竹不改色
和謌
権中納言藤原雅親
すなほにてみかき
のうちに色かへぬ
竹のこゝろはきみ
やしるらむ
夏日同詠竹不改色
和歌
権中納言藤原勝光
君かへむよはひも
さらにわか竹のかは
らぬいろをともとち
きりて」六
夏日同詠竹不改色
和歌
参議左大弁藤原教秀
いくとせも色はかは
らしくれ竹のおひそ
ふかすに千代をか
さねて
夏日同詠竹不改色
和謌
参議右近衛権中将藤原実右
君そ見む色もかは

○ナシ―一尺二寸九分
○和謌―和哥
○ナシ―一尺二寸六分
○和歌―和哥
○ナシ―一尺二寸五分
○和歌―和哥
○ナシ―一尺二寸四分
○和謌―和哥

らて呉竹の台に
千世のかけをな
らへて」七
夏日同詠竹不改色

和歌
右兵衛督藤原為富
さらにいまおひそふ
色も千世をふるみと
りもおなし庭のく
れたけ
夏日同詠竹不改色

○ナシ―一尺二寸四分

和歌
参議右大弁藤原綱光
我きみのときはの
御代をちきりてや
みきりの竹の色は
そふ覧」八
夏日同詠竹不改色

○ナシ―一尺二寸四分

和謌
蔵人頭右近衛権中将源雅行
くれ竹の葉かへぬい
ろをよろつ代の友と
やきみもちきりを
くらむ
夏日同詠竹不改色

○ナシ―一尺一寸八分

和謌
蔵人頭左中弁藤原資世
わかきみのめくみを
そふるくれ竹はかは
らぬ色をいく千世
かへむ」九
夏日同詠竹不改色

○ナシ―一尺一寸八分

和謌
左近衛権中将藤原教国
ことしなをおひそふ
竹のわかみとり色
もかはらて千世やか
さねむ
夏日同詠竹不改色

○和謌―和哥

和謌
左近衛権中将藤原雅康
うつしうへて代と□(へ)む
きみかともなれや竹(墨滅)
竹のうてなのとき
はかきはも」一〇
題者　飛鳥井中納言
読師　帥大納言
講師　雅康朝臣
御製読師　関白
講師　飛鳥井中納言

○和謌―和哥

○和謌―和歌

○以下冒頭ニアリ

享徳三年

○享徳三年―ナシ

（武井和人）

【略解題】

底本の書誌に関しては、『国立歴史民俗博物館資料目録［4］田中穣氏旧蔵典籍古文書目録［国文学資料・聖教類編］』（二〇〇五・三、以下『目録』と略称）の記載が、その基礎的データとならう（引用に際して。

【数量】写本一冊

【装丁】紙縒仮綴

【表紙】共紙表紙、二六・〇×一八・八

【外題】打付、左肩、墨書「享徳三年　御会（以上別筆小字）／懐紙写」

【本文】四～七行　字高二二・五

【丁数】共紙表紙共一二丁

【奥書等】裏表紙オ（巻末）「題者　飛鳥井中納言／読師　帥大納言／読師　雅康朝臣／御製読師　関白／読師　飛鳥井中納言／享徳三年（一四五四）」

【極等】川瀬目録・室町末期

【備考】享徳三年（一四五四）六月十七日に後花園天皇以下二十名の公卿殿上人によって催された歌会の懐紙を転写したもの。三行五字の字配りなども忠実に写している。歌題はすべて「竹不改色」。参加者は順に後花園天皇（慣例により署名しない）・貞常親王・一条兼良・二条持通・三条西公保・三条実量・烏丸資任・三条公綱・正親町三条実雅・飛鳥井雅親・日野勝光・勧修寺教秀・小倉実右・冷泉為富・広橋綱光・庭田雅行・武者小路資世・滋野井教国・飛鳥井雅康。

紙背に、鷹司房輔、勧修寺経慶、中院通茂等の着到歌の写しが見える。（八頁）

なほ、川瀬一馬編『田中教忠蔵書目録』（私家版、一九八二・一一以下『川瀬目録』と略称）には、「享徳三年御会懐紙写　一冊3／室町末期写。仮綴。美濃本」とある（六〇頁）。『川瀬目録』は底本を「室町末期写」とするが、紙背に見える歌人達の生没年から考ふるに、江戸中期写と見做すのが妥当であらう。

○

本歌会について、早く、『続史愚抄』に以下の記載を見る（小字双行は、ポイントを落として一行書とした。以下同様）。

（享徳三年六月）○十七日丁酉。有二和哥御会一。晴儀。以二議定所一為二其所一。題。竹不レ改色。哥仙式部卿貞常親王。公卿関白持通。作二進次第一。已下殿上人等参仕。征夷大将軍義政。権大納言。為二人数一、読師大宰権帥。実雅。下読師右中将教国朝臣。読師丶丶将雅康朝臣。御製読師一位大納言義政。将軍。同講師飛鳥井中納言雅親。奉行蔵人頭左中弁資世朝臣。伝奏民部卿。親通。今日不参。○綱光公記、或記

また、井上宗雄『中世歌壇史の研究　室町前期』（〔初版〕風間書房、一九六一・一二）においても、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵『禁中御会和歌』〔五〇一・三三六〕を紹介する中に、次の如き記載を見る。

享徳三年六月十七日宮中御会（題は竹不改色。題者等は、御製講師が義政のほか前年と同。作者は親通・持為が加わらず、兼良・三条西公保・烏丸資任・勧修寺教秀・小倉実右・広橋綱光・武者小路資世が加わり、他は前年と同。師郷記・綱光記参照）。（一七

右和哥題、来十七日内々可被披講、可令予参由、謹■所請之状如件、

六［（月十四日）（内）］　　参議綱光（広橋）

（挿入紙）
「十七日、雖陰気、不降雨、三伏暑甚、申剋計着衣冠、下結、小雑色三四本、笠持等召具参　内、尤雖可召具布衣、以略儀為先、依可有和哥御会也、帥卿以下少々已参候、先之准后（一条兼良）・関白（一条持通）令参　内給、御装束頭左中弁就奉行申行之、母屋御簾悉垂之、端御簾悉巻之、指図見左、○今見エズ、民部卿為伝奏兼日儀申沙汰之処、俄称所労不参、何事哉、頃之　室町殿内々以御歩儀、自唐門御参、於長橋局有着御々直衣、御下結、紅御単、前藤宰相父子（冷泉（高倉）永基・永親力）粧御装束、頃之出御議定所、関白令候御簾給、次奉行職事参御前、蒙　天気、可召人々歟所、無其儀、如何、不依褻晴、毎度事也、尤不審／＼、次（式部卿（伏見宮貞常親王））親王御方自年中行事辺入当間（障子脱力）、議定所西面、令着座給、次准后・関白令着給、以上東上北面、室町殿自北方令入当間給、東面、次帥卿以下次第入西面北之第一間着座、御湯殿上也、（議）（所）儀定。狭少間、白地被用之、見指図、至日野中納言着座、参木一向不着、依狭少也、但臨期以奉行飛鳥井中納言（雅親）有座次第可着座云々、仍左大弁宰相（勧修寺教秀）以下可着座処、有所存不着、何事哉、経剋以外事也、凡悉可着座事也、然座狭少間、至納言可着趣歟、兼有沙汰間、左大弁以下申所存歟、尤以不可然事歟、数輩上首不殊儀不着処、予何可着哉、云当時儀、旁以加斟酌、其上次第可着由有上宣、旁以勿論／＼、次雅遠（木幡）持参文台、次顕長（東坊城）敷講師円座、次敷読師円座、如何、先読師円座可敷也、又読師円座返様敷之云々、不可説／＼、次顕長持参切灯台、有内敷、移置高灯台、灯退、便不撤高灯台条、如何、然而者重可撤歟、次奉行職事取集殿上人懐紙、持参置文台、講師円座、自脇置之、退出之

右和哥題、来十七日内々可被披講、可令予参由、謹■所請之状如件、

六［（月十四日）（内）］　　参議綱光（広橋）

（挿入紙）
「十七日、雖陰気、不降雨、三伏暑甚、申剋計着衣冠、下結、小雑色三四本、笠持等召具参　内、尤雖可召具布衣、以略儀為先、依可有和哥御会也、帥卿以下少々已参候、先之准后（一条兼良）・関白（一条持通）令参　内給、御装束頭左中弁就奉行申行之、母屋御簾悉垂之、端御簾悉巻之、指図見左、○今見エズ、民部卿為伝奏兼日儀申沙汰之処、俄称所労不参、何事哉、頃之　室町殿内々以御歩儀、自唐門御参、於長橋局有着御々直衣、御下結、紅御単、前藤宰相父子（冷泉（高倉）永基・永親力）粧御装束、頃之出御議定所、関白令候御簾給、次奉行職事参御前、蒙　天気、可召人々歟所、無其儀、如何、不依褻晴、毎度事也、尤不審／＼、次（式部卿（伏見宮貞常親王））親王御方自年中行事辺入当間（障子脱力）、議定所西面、令着座給、次准后・関白令着給、以上東上北面、室町殿自北方令入当間給、東面、次帥卿以下次第入西面北之第一間着座、御湯殿上也、（議）（所）儀定。狭少間、白地被用之、見指図、至日野中納言着座、参木一向不着、依狭少也、但臨期以奉行飛鳥井中納言（雅親）有座次第可着座云々、仍左大弁宰相（勧修寺教秀）以下可着座処、有所存不着、何事哉、経剋以外事也、凡悉可着座事也、然座狭少間、至納言可着趣歟、兼有沙汰間、左大弁以下申所存歟、尤以不可然事歟、数輩上首不殊儀不着処、予何可着哉、云当時儀、旁以加斟酌、其上次第可着由有上宣、旁以勿論／＼、次雅遠（木幡）持参文台、次顕長（東坊城）敷講師円座、次敷読師円座、如何、先読師円座可敷也、又読師円座返様敷之云々、不可説／＼、次顕長持参切灯台、有内敷、移置高灯台、灯退、便不撤高灯台条、如何、然而者重可撤歟、次奉行職事取集殿上人懐紙、持参置文台、講師円座、自脇置之、退出之

五頁）

また、同書改訂版（一九八四・六）所掲「室町前期歌書伝本書目稿」には、

享徳三年　一四五四　甲戌

六月17　内裏和歌御会　禁中御会和歌（書陵部）・享徳二年六月十七日和歌御会詠草（史料編纂所）　竹不改色　御製・貞常・兼良・持通・公保・実量・義政（御製読師）・実雅（読師）・資任・公綱・雅親（題者・御製講師）・勝光・教秀・実右・為富・綱光・雅行・資世・教国・雅康（講師）（五九四頁）

とも記載される。

以下、関連する史料を摘記しておく。

◆十六日丙申、

晴、向飛鳥亭、明日御会詠草為談合也、先備、叡覧畢、被直下き、凡先談合飛鳥、後可備、上覧之処、近年内々儀歟、御会進入毎度直被下間、如此致沙汰者也、祖父入道殿見御記、　室町殿入見参事、今度被略了、頃之参殿下（一条持通）、条々申談之後、帰蓬宅、雨下、晴陰不定、

（『綱光公記』〔遠藤珠紀・須田牧子・田中奈保・桃崎有一郎「綱光公記―享徳三年暦―」『東京大学史料編纂所研究紀要』第二一号、二〇一一・三〕による。以下同。底本は、国立歴史民俗博物館蔵綱光自筆本。（内）は内閣文庫蔵本））

○

十七日丁酉、

陰、　禁裏今日和歌御会也、早旦遣請文畢、

竹不改色、

時、入座上足膝行□時、又進座上、所為如何、又懐紙不入懐中取両手、雖有先規、当家大略入懐中、且又多分儀歟、但懐紙不多間、可持両手由、執柄并飛鳥黄門被命云々、次予懐紙持左右手、文頭有左、々方少指上テ持之、凡左右手指出様持之也、自年中行事障子辺進出、入脇戸北東行、更北行、雖御眼路、不蹲居、持文故也、礼更経簀子北端也、入北第一間、先入座下足、南行経桂南西室町殿御着座前也、人々同之、講師円座之前ニ跪テ聊披懐紙端、見端作、仮令也、則巻之、少膝行、先進座下、両三歩也、後以右手及手置人々懐紙上、名可向御前正也、然而聊向臨期忘脚、遺恨〳〵、但室町殿御前依便宜沙汰之、不可為例々々々、次逆行、先退座上足、凡常ノ膝行様ニハ不沙汰也、聊微令沙汰也、見代々御記、親王関白以下至室町殿無礼、人々同之、経本路退出、今度候北方、随便宜也、抑自北可進出条、可宜也、然而自西可進出由、有其沙汰、尤以無謂事歟、武者小路前内府・三条前内府、以上入儀定所当間之間、自西進出条可然事歟、帥卿・日野大中両納言猶自北進出、臨期人々所為又不同、如何、室町殿御起座時、人々動座、次帥卿蒙　天気、着読師円座、次召講師、雅康朝臣引裾参進、正不着円座歟、次召下読師、教国朝臣参進、候読師傍、次召講頌人々、日野大納言・新大納言・飛鳥井中納言・日野中納言・右兵衛督等也、此間下読師懸重懐紙退出、次読師取最末懐紙、披置文台上、文上当講師、次講頌人々披講、殿上人一反、参中納言・参木・散三位二反、関白・大臣・室町殿三反也、事了帥卿取懐紙、置文台下、次室町殿令着読師円座給、人々同座、講頌依仰不覆座也、次室町殿目飛鳥井中納言、則着講師円座、正不着云々、次被進　御製、次室町殿披　御製、令置文台上給、講師一反見下シテ読之、次第披講七反也、末二反高講之、其詞云、

竹不レ改レ色ヲといへる事ヲよませ給やまと歌と読之、又臣下端作読之、其詞云、夏ノ日同シク竹不改色トいへる事ヲよめるやまと歌、殿上人名字二字、四位加朝臣、四位参木某朝臣、三位参木左大弁藤原朝臣・右兵衛督藤原朝臣、権中納言藤原朝臣、権大納言、〻朝臣、権帥藤原朝臣、関白、准三后、式部卿親王、又大臣ハ前ノ内ノ大臣、如此読之、

雅康朝臣講師畢候講頌畢、次人々覆座、所役人々退出其後儀不伺見、次　入御、人々動座、奉行取懐紙、所役殿上人撤文台以下云々、於常御所有一献、関白・親王御方・室町殿有御前御参、関白殿御陪膳雅行・教国等朝臣也、帥・日野大中納言・飛鳥井以下、少々候御前、及暁更室町殿御退出、人々退散、予御前御前、無為珍重由申入退出、公宴初度参懃無為、公私添自愛気味者也、珍重〳〵、予不候講頌条、無念事也、

一、散状雖奉載親王、臨期不可然由、其沙汰出来間、木下関白以下載云々、永徳節会散状猶不載申云々、今度晴御鞠奉載公卿内き、案之、雖載申、公卿前ニ式部卿親王ト載申、更公卿ト書之テ関白以下可書歟、可否哉、如何、

一、御次第依仰関白令作進給也、

一、予申沙汰処、空延引之後昇進間、頭弁資世朝臣申沙汰了、近例無之、古今定有其例歟、尤無念至也、散状以下続左、○今見エス

一、打敷等今度被新調畢、

一、御装束様、今案御沙汰也、予依仰去三月比度々申談執柄畢、

一、予懐紙書様如此、飛鳥井中納言相談畢、公卿時高檀紙、高サ

一尺二寸五分、或三寸ニ沙汰之云々、為参木、猶代々二寸五分御沙汰間、如此沙汰之、殿上人一尺一寸五分計云々、先備　叡覧、被直下畢、代々公武被入見参、今度於武家略之、

夏日同詠、竹不改色、

和歌、

参議右大弁（俊）藤原綱光

我君（きみ）のとき葉の
御代をちきりてや
みき（みき）りの竹の色は
そふ覧　」

○

十八日戊戌、

晴、及晩甚雨、早旦参、昨日御会無為由申入之、……

◆丁酉、今日　禁裏和哥御会也、題、竹不改色、題者飛鳥中納言（井脱）（雅親）、御人数、式部卿親王（貞常親王）・准后（一条兼良）前関白（一条持通）・関白（実量）・武者小路前内大臣（勝光）・室町殿（正親町三条実雅）・帥卿（烏丸資任）・日野前大納言（正親町三条公綱）・三条大納言（実右）・飛鳥井中納言（為富（冷泉））・日野中納言（勧修寺教秀）・左大弁宰相（実右）・小倉宰相中将（右大弁宰相（広橋））・右兵衛督（為富（冷泉））・綱光朝臣（滋野井）、殿上人雅行（奉行（武者小路））朝臣頭中将（飛鳥井）・資世朝臣頭左中弁（飛鳥（井脱）中納言）・教国朝臣・雅康朝臣、講師雅康朝臣、読師帥卿、御製講師室町殿（庭）、読師室町殿、

（『師郷記』〔史料纂集本による。底本は国立国会図書館蔵師郷自筆本〕）

（武井和人）

2 続十首和歌

〔国立歴史民俗博物館蔵田中本『続十首和歌』（H－七四三－一〇九）〕

①続十首和歌（享禄四冬）

享禄四年十一月十日於伏見殿御張行、予被仰清書、今晩逍遥院〈点之事被仰了、同十五日ニ被遣了

暁雪

ふる雪もしらけたる夜や暁の　鳥もそら音に鳴かはすらむ②菊
相坂の杉はむもれて山かつら　かけのたれおの雪はらふらん③前左
ひとしれす積りし雪の梢より　また夜ふかくも鳥や鳴らん
鳥かねのきこゆる空は天の戸も　やくや（は）明し雪の光に
鐘の声鳥のなく音もうつもれて　雪ふかゝれや暁の空④言継
ふる雪をそらにまかへてあけぬとや　またきに鳥の初音鳴らん長雅朝臣
閨のうちに聞もさなから暁の　枕ふりうつむ雪の音かな⑤梶
まきれなく聞そ寒けき風ませに　雪の窓うつ暁の声⑥桂
かけやいまふらぬかうへにつもるらむ　有明の月の嶺の白雪　御
〔破損〕※以下同〔いかはかり　つもる□か見〕〔伏見宮本〕※以下同　〕む有明の　光そひたる庭のしら雪
〔おき出てゆく〕〔跡や有〕　〕明の　月におとろく雪のした道
霜の色にまかへん物か有明の　雲の名残のうす雪の空
した氷る床のふすまのうす雪も　なを暁やかさねわふらん⑦隆
ふかき夜の雪より出る鐘の音や　枕にちかくさえまさるん公範

朝雪

いつくをかくまとも見まし野も山も　なきたるあさの雪のうへ哉　桂
朝な〳〵かせのやとりやしら雪の　積りもあへぬ庭の松か枝
朝戸明て簾をまけは四方も猶　みる〳〵ちかき山のはの雪⑧言継

朝日さす影にうつろふ花なれや　なへて野山の木ゝの白雪
あさ日影又かきくもりふる雪に　遠かた人や道まよふらん　下句新後拾遺法印浄弁卯花のかきねはかりの夕月夜遠方人の道やまよはん　相似候歟
とへやけさまた初雪の消やらぬ　跡たに人におしみやはせむ
とはるへきたよりもしらて松の戸は　明るもやすき峯のしら雪[9]三大
とはれすは誰をうらみんわか宿に　契りもをかぬけさの白雪隆重朝臣
雪ははやけさふりうつむ庭の面の　こほらぬ程をとふ人もかな」一
鳥の音もうつもれはてゝ柴の戸は　雪に明やらぬ今朝の空かな
けしきはむつま屋の梅もふる雪に　もてはやされて明る色哉　三
おなしくはふるをも見はや夜の程に　はれたる庭のけさのうす雪　今出川大納言
九重やつかふる道のたえぬ世も　あとある雪のあしたにそみる　長雅朝臣
心ある人にはつけよ朝ほらけ　つりする船の雪のうら波　源中納言

夕雪

さやかにも松の葉ぬるゝ夕日影　つもらぬ雪やみそれなるらむ
残りつる入日のかけはきえなから　夕を余所の雪の松か枝
暮渡る夕を残す雪の中に　嵐そさそふ入相の鐘
夕まくれふるかとみしや三日月の　かけもそれなる庭の初雪
夕月夜又うす雪の木の間にや　心つくしの影をそふらん　公範
暮行は夕ゐる雲もそのまゝに　雪にたなひく遠かたの山　若
いつとなき色ともみえす夕月夜　さすや岡への松の白雪　今出川大納言
「　」の夕つく日　さしもえならぬ庭の白雪予[10]
宿?「　」帰るさに　雪を吹まく袖の山かせ　〈ふみ分てとひくる人〉〈もかなゆふ狩おのゝ〉
真木の戸もさゝてみよとやしはし猶　雪の光のくれ残るらむ　源中納言
木かくれの夕さむけくふりすさむ　雪をねくらの鳥の一声
飛鳥のむあすかのさとのねくらをや　雪にたとらむ夕暮の空
ふる雪にそれともみえすねくらとふ　夕山からす声はかりして
つもりては名たゝる松の嵐たに　音なき雪の暮のしつけさ隆

夜雪

ふるほとのおほつかなさもうは玉の　よのまの雪は明てこそみめ
をのつからよる光ある玉とみて　やみにもしるき庭のしら雪　御
木からしも積りし後は吹たえて　しつけきよはの雪折の声
呉竹のよのまにつもる白雪を　みよとやつくる下おれの声　言継朝臣
吹しほるたけのさ枝の風の音も　夜ふかき雪や降うつむらん
はらはすはむもれいたしや篠の屋の　一夜はかりの雪にたへても　三大[11]
よるとなきみかきの雪の光にや　衛士のたく火も消てみゆらん」二
埋火のきえすはと思ふ夜とゝもに[12]　雪の光そ我命なる　世とゝもを夜ニ用事有　沙汰事候歟
さよ風はしつまる窓に音するも　それかと雪をきく心ちして源中納言　みる歟
夜もすから月の光もふる雪も　さやかにみゆる庭の面かな
てる月の影も光もうすくこく　積りわけたる庭の白雪　三
かけなからふりくる雪はさゆるよの　月よりちらす光とやみん　今出川大納言
かきくらしふるともわかぬよるの色に　積りはてたる雪のさやけさ　公範
あけぬまのふかさあさゝもいかならん　はれやらぬ雪の里の通路

山雪

山さむみあらしや袖にまきもくの　ひはらさひしき雪の色かな
玉すたれあかすみゆやとまきもくの　ひはらの雪の山もさたかに
ちりひちの山となりしを思ふにも[13]　雪のつもるは限りこそあれ
みし春の花もをよはし松杉も　雪にましらぬ御吉野の山　桂
わすられぬ春と秋との面影も　ゆきのうへなる三吉野の山
「　」うつもれて　春みし花のいろそへたてぬ　三　〈山とりのおの〈の雪に〉〈あさあらしたゝく北〉
「　」窓おしあけて　むかへは雪のこしの白山　御[14]
ふもとなる吾立杣の小野の里　雪ふみ分て今もとはなん　御

小野山の雪にまかはすすみかまの　煙や空に立のほるらん
大ひえやをひえの山も名もたかく　都のふしの雪をなかめて[15]
はらひあへぬ雪やさなから水鳥の　春は野山にかゝる白波　公範[16]
明渡る嶺こえて行かさゝきの　つはさにふれる雪やみゆらん
晴そむる雲間さたかに遠かたの　山より雪はあらはれにけり　隆重朝臣
このまゝに降やつゝかむけさの間は　高ねはかりの雪の遠山　今出川大納言

都雪

四方にちる花とや見まし鳥かなく　関のこなたの雪の曙
なかめては都にのみと思ふかな　おなし千里の雪の曙　今出川大納言
小車のひきすてしあとか下の帯の　道を都の雪の曙　桂
見わたせは一色香にふる雪の　柳さくらは春の錦木
さき出し花の都の面かけを　ちらさてにほへ木ゝの白雪　源大納言「三とはれとふなさけの色も都行く　人の心の道野への雪
おもひやるさそなこし路の旅の空　かゝる都の雪をみるにも
まとのひまむかへる人のたよりにも　都の雪はたゝにやはみる
心ある人のすまゐは都にも　わきてや雪のふかくみゆらん
たれか又むくらの宿も都そと　なくさめかねて雪をみるらむ
わきてみよおなし都の家〳〵に　雲ゐにちかき雪の曙　公範
所からこゝは都の玉のちり　玉の砌にみかきなすらむ
山さとはめつらしけなくふる雪も　都や花の名にもたつらむ　若
春ちかみ梅さき出てたかやとの　雪をも花の都なるらん

恋天象

大空もきはめはあらむたとへても　むねにみちぬる思ひもそうき
思ひ出る事をあまたの独ねや　霜夜の空に消てかなしき[17]
さそはれてうはの空にもなる物は　たか夕暮の心なるらん　妙

（それとなく物おも）
［　　］ふ比は大空の　月にことはる涙もろ也
（たれならぬ人人の）
［　　］おもかけさそひきて　袖にや月のやとりとふらん
恋しさのたれかは空に思ひ出む　おなし雲ゐの月はめてゝも
逢瀬あらは命のうちの一夜をも　かけてやまたむ天の川波　御
かさゝきやかけしを思ふ契りさへ身をうき中の橋と成けん
風のうへにうかへる雲の一すちも　我中そらにめくりあはゝや
うつり行心もみえて浮雲の　空たのめなる契りしもうし
思ふには袖そしほるゝあま雲の　よそにも人のへたて行身を
うき秋の涙になりぬ露時雨　わか身一つの袖をもとめて
かひなしや月にといひし契りさへ　いく夜涙の雨になすむらむ　隆重朝臣
たのめつゝ待夜を思ふ音信は　有ける物を村雨の空

恋地儀

おもふにも恨やふかき海山の　へたつる人の中のくるしさ
しらせはや谷のもれ木（むゝ）[18]　隆重朝臣
色かへぬならひ何とあさはかに　おもひ岡への松のうへの露」四
誰にいましかまのかち路事とひて　思ふ人にもあひそめてまし[19]
へたてある心なりせは関もりの　うちぬるひまもかひやなからむ
たか里としらぬ行ゐはまよふとも　いひしはかりの道や尋ん
あはれいま思ひふる江のみをつくし　つくす心のしるしともみよ
思ひ川うき瀬の波はたかくとも　うたかた人にしつみはてめや
恋しなん命もけふかあすか川　涙の渕に身はしつみつゝ　源中納言
袖のうへにたえすなかるゝ涙川　身には逢瀬のなとよとむらん[20]
なかれての逢瀬もしらす我袖に　思ふいもせの河はあれとも
よとゝもにたつ波かせも袖のうら　恨やふかく身をくたくらん
行末の人の契りはあらかねの　土とともにや思ひをかまし

つれなさの人の心を思ふには　くるまをくたく道よりもうき　三

雑植物

さそふかたありともおなし水のうへは　身を浮草の跡もとめしを

〔〈かひなしやかくとは〉〕すれと和哥の浦に　玉も[ま]しらぬ浪のもくつは

〔慈照院贈太政関下百首〕〔哥にいたつらにかくもはかなし和哥のうらや玉もましらぬ浪のもくつを当座覚悟候間猶如何と申候〕

〔〈をのつから人し〉〕とはねはわか宿も　蓬むくらのしきけ宿かな

木からしは吹もたゆまぬ冬の峯に　独つれなき松の色かな

うつろはぬ色こそあらめふく風の　音もつれなき松のさひしさ　公範

いかて我しる人にせん和哥のうら　松の言の葉風のすかたも

さはかりもたかつくりなす枝ならし　道なき峯の岩かねの松

峯遠きふもとの真柴ふくかせに　里の煙は打なひきつる[23]

情をは春と秋とにわすられて　つねに岩木の陰にふる哉

春秋の心の色もそれならて　哀岩木の身はふりにける　御

春秋のかけにそたのむ花もみち　うつろふ色に身はまかせつゝ

みかきなす庭に葉かへぬ玉椿　八千代の陰も君のみそみん

のかれきてすなほ成せはたのむらん　竹を籬の奥の山住

君そみんうへをく松の二葉より　木たかくならむ千代の行末若

[22]雑動物」五

雑動物〈ママ〉

いつれとは君やさためん鶴亀も　あらそひはてぬ千世のかきりを　公範

和哥の浦に道まな鶴の鳴声や　雲ゐにおなし友したふらん

暁はまくらそはたて聞侘ぬ　なれもや老の友つるのこゑ

引塩の跡はるかにも澄のほる　月におしまぬあし鶴の声　三条大納言

君か代は浜の真砂に鳴鶴の　声は千とせの数やそふらん

入日さすみきはの木陰雨晴て　鷺のゐる江の水のはるけさ　隆重朝臣

白妙の鹿よきゝすよいまもまた　出る時代にかはるへきかは

たかねこす嵐に落てむさゝひの　声する遠の里のさひしさ

しつかなるね覚にそ聞。かねの　声をしるへに鳥や鳴らん

哀にも帰りなれぬと暮行は　野かいし牛の家路もとめて

いつまてかなれも思ひの家の犬　さらぬうき世につなかれもせむ

〔〈か〉〕け深〔〈き山ならね〉〕ともさひしさは　ましらなくなる夕暮の声

風寒〔〈み巌かく〉〕れにゐる猿の　声は木の葉にうつもれそ行

おさまれる世に事とはむ桐の上に　すむてふ鳥の有やなしやも

僻案愚点四十一首

堯空

[23]入道式部卿親王　恵空

御　四首

中務卿親王

桂貞敦三

妙法院座主

妙覚胤二

梶井宮　無

若狭見殿若宮三

三条前左大臣四

三条大納言公頼卿一

今出川大納言晴季卿五」六

源中納言重親卿庭田五

持明院宰相　無

隆重朝臣四条宰相五

言継ゝゝ一

高辻式部□□□□

長雅朝臣二

小松谷本願寺

公範律六

（酒井茂幸）

【略解題】

底本の書誌に関して、『目録』に以下の記載を見る。

【数量】写本一冊

【装丁】紙縒仮綴

【表紙】共紙表紙　二四・〇×二一・〇

【外題】打付、中央、墨書「続十首和歌中享禄四」

【本文】一四行　字高二〇・〇

【丁数】表紙共八丁

【奥書等】巻尾「僻案愚点四十一首／尭空」

【備考】冒頭に「享禄四年（一五三一）十一月十日、於伏見殿御張行。予（＝山科言継）」とあり、状況が知られる。表題は「続十首和歌」（つぎじっしゅわか）とあるが、形態上は続歌ではなく、十首歌会である。題は「暁雪・朝雪・夕雪・夜雪・山雪・都雪・恋天象・恋地儀・恋植物・恋動物」。これを各題ごとに十四人の参加者の歌が並ぶように編集し、清書するのが言継に課せられた仕事であったようで、それを逍遙院（＝三条西実隆。「尭空」はその法名）に届けて合点せしめたのである。末尾に「僻案愚点四十一首　尭空」とある。また合点歌に限り歌の下に一字名などで作者を顕わし、巻末にそれを集計した点取表が加えられている。出席者は入道式部卿親王（邦高親王）、中務卿親王（貞敦男）、妙法院宮覚胤法親王など伏見宮家の人々をはじめ、三条実香、三条公頼などの公家が見える。新出資料。（七二頁）

『川瀬目録』には「続十首和歌享禄四中冬　一冊34／山科言継筆。紙背文書。美濃本。箱入」（七〇～七一頁）とある。筆跡から見て、言継筆とする川瀬説は首肯される（なほ後述）。

本書と同じ内容を有する伝本は、いま一つ、宮内庁書陵部図書寮文庫蔵伏見宮本『点取和歌冬十見殿』（伏―五七九）が知られる。該書は既に、石澤一志・酒井茂幸・武井和人・日高愛子・山本啓介「室町期歌会資料集成稿―釈文と略解題―㈠」（『研究と資料』七三、二〇一五・七）にて、釈文と略解題を公にした。乞参看。

まづ、該論文における瑕疵を訂正しておく。「夜雪」題終はり近く、「かけなから」歌と「あけぬまの」歌との間に、以下の一首があり、それを脱してしまつてゐた。

かきくらしふるともわかぬよるの色に　積りはてたる雪のさやけさ　公範

底本と伏見宮本の異同は、以下の通りである（①～㉑は、本文中の注記箇所参照）。

①「続十首和歌～被遣了」……ナシ
②「菊」……ナシ
③「前左」……ナシ
④「言継」……ナシ
⑤「梶」……ナシ
⑥「桂」……ナシ
⑦「隆」……ナシ
⑧「言継」……ナシ
⑨「三大」……ナシ
⑩「予」……ナシ
⑪「三大」……ナシ
⑫「に」……の
⑬「ひ」……ゐ
⑭「御」……ナシ
⑮「も」……の
⑯「公範」……ナシ
⑰「思ひ出る」歌……ナシ
⑱「（歌句闕）」……いたつらに下ゆく水のたえぬこゝろを
⑲「ならひ」……ならひを
⑳「なかるゝ」……なかれて
㉑「つる」……つゝ

㉒「雑動物」……ナシ

㉓「つる」……つゝ

㉔※伏見宮本ノ作者附ハ以下ノ如シ

御詠　四首
桂　三首
妙　二首
若　三首
三　四首
三条大納言　一首
今出川大納言　五首
源中納言　五首
隆重朝臣　五首
言継朝臣　一首
長雅朝臣　二首
公範　六首

これらの異同の検討、両伝本の関係についての詳考は別稿に委ねるが、二点、言及しておく。

⑩、底本は作者を「予」と注記する。この歌は、言継の自撰家集『拾翠愚草抄』に、

夕雪

ふみ分てとひくる人の夕つくひさしもえならぬ庭のしら雪（三八二）

と見える言継歌である。以て、本書の筆者を言継と見る川瀬説の徴証たりうると判断する。

底本、伏見宮本、いづれも、闕歌・闕脱箇所があり、親子関係を想定することは出来ない。共通する草稿があつたと見る他あるまい。

（武井和人）

3 天文廿三年御会始

〔国立歴史民俗博物館蔵田中本『天文廿三年御会始』（H－七四三－三三一）〕

天文二十三年御会始（外題）
天文廿参年正月廿日（補入）御会初也（端作題）

梅有佳色
右大臣晴嗣
なへて猶かはらぬ色に契置て　幾春なれしやとの梅か枝

大納言兼秀
四方に今朝匂ひも色もふかき江の　みなみにかすむ梅の春かせ

権大納言永家
さきそふる色も匂ひも梅のはな　ふかきめくみの春を見すらん

按察使言継
やとに先待えし春のうれしさを　色にも出てさけるむめか香

権中納言為益
秋を⇑（へ）む菊のよはひの開そむる　梅こそ根さし色［の→も］（上書）にほひも

権中納言国光
はるは世になへての花の色もかも　さきそむる梅の枝に見すらん

参議平時長」一
いろなへておりこそかさせ花衣　九のかさねの八重のむめかえ

右衛門督永相
さきそふる花も若枝のやとの梅　みるにたへなる色香をそしる

少納言平時秀
春ことに色香もふかく咲梅の　花や千とせのかさしなるらん

典薬頭丹波朝臣頼景

色〳〵のさきそふ梅の木するより　匂ひを四方に春かせのそら
左衛門尉以定
一しほに色かもふかし難波津の　春にさかへてさくやこのはな
左衛門尉家友
をさまれる御代のひかりにはるを猶　いろ香をそふる庭のむか蕃（ママ）え
右兵衛尉良」二
いく春かちきりてをみん君か代に　花も色そふやとの梅か枝
盛友
君か代のかはらぬ春に開花の色　色猶ふかきやとのむめか香
吉綱
きみか代のためしとみえていく春も　かはらぬ色ににほふ梅か枝
大膳権大夫大江俊直
春ことに止（の）いろ香をそへて咲山の　花こそ君かかさしなりけれ
右衛門大夫長治
いくとせもみきりにさける梅の花　猶色色（ママ）そふるはるは来にけり
兵部大輔涼藤之
咲そむるみきりの梅のひときより　世はみな春の色やそふらん
准三宮義俊」三
物ことにあらたまり行春さく（ママ）　老木の梅や千代をみすらむ
阿茶麿
うつしうへし軒はの梅の春へて（ママ）　かはらぬ色にさきそ匂へる
沙門清誉
二葉よりにほふ木なれはむめのはな　おひさきしよりしるし君か水世の春
宗養
きみかため根こしてうへし梅枝も　風ふかぬ代の色や見すらん
一千世丸
咲梅の色をおもへは春風の　なさけはあさきにほひなりけり
紹巴
花といふ花のこのめの色や先　わきて梅よりならひそむらん
如本うつし申候」四
御当座
早春　晴嗣
春きぬと四方のけしきのいつしかに　かすみわたりて今朝はみゆらん
海霞　国光
もしほ焼けふりもそひていせの海や　波もひとつにかすむ浦かせ
梅風　阿茶丸
咲やこの花ともろこしけふの春　風のたよりに匂ふ梅か枝
川柳　永家
春風のむふ（ママ）もとくも川つらに　水のみとりの青柳の糸
帰雁　言継
いかにせは引もとめまし梓弓　帰るはおしき春のかりかね
春月　時秀
山のははそこはかとなく霞つゝ　おほろに出る春の夜の月」五
春雨　家友
そことなく山は霞にうつもれて　ふるともみえぬ春雨のをと
嶺花　永相
さくとみし高ねの花の色そへて　霞そ匂ふ明ほのゝそら
野花　俊直
人めなきかけ野の末も春はたゝ　花をやみちのたよりなるらん
苗代　万代

なかれくる花の名残やおしむらん　苗代水にかくるうき草

忍恋　藤之

をのつからつらさもことに出やらて　忍ふにまくるうらみとをしれ

見恋　頼景

つらき身の涙は袖にたえやらて　見し面影そいとゝ恋しき」六

待恋　宗養

あひみてのわかれならはそなくさめん　まつこ(?)なからの鳥の初声

逢恋　長治

逢みては忘られかたき行へとや　おも影のこすしのゝめのそら

恨恋　盛友

数ならぬ身をし思へそつれなきも　なにとうらみんことの葉もなし

山家　良

陰ふかき住居なからも柴の戸に　問来る人はなをそまたるゝ

窓竹　吉綱

呉竹に窓うつ夜半の風の音や　月もくもらぬ時雨なるらん

旅宿　以定

たのめてもかひこそなけれ知しらぬ　かり寝のやとの人の心は」七

述懐　紹巴

わひしさの我身ひとりは世中の　おさまる時そおもひしらるゝ

神祇　義俊

春秋とわかし心よ春日山　おきふす鹿にあらぬ我にも

《補入》

梅有佳色　左中将通興

いく春もかはらぬ色や千とせ■(墨滅)［ふる→を(上書)］も袖にふれつゝにほふ梅かゝ

天文廿参暦正月廿日御当座也

是相進せし申まゝかき申候

はしな会子(?)にて御有

（八行分空白）

天文二十三年五月五日　別」八

こゝろこそ心まよは

すこゝろなり

心にこゝろ〳〵

ゆるすな

（半面空白）」九

（日高愛子）

【略解題】

底本の書誌に関して、『目録』に以下の記載を見る。

【数量】写本一冊

【装丁】紙縒仮綴

【表紙】共紙表紙、但し墨付の紙料(ママ)とは別料紙。　二二・二×一七・九

【外題】打付、中央、墨書「天文二十三年御会始」

【本文】九～一一行　字高一七・〇～一八・〇

【丁数】墨付八丁

【首題】「天文廿参年正月　御会初也」

【奥書等】七丁ウ「天文二十三年（一五五四）五月五日　別」

【極等】川瀬目録・室町末期

【備考】「御会始」とあるので宮中や仙洞の会のように見えるがそうではなく、近衛家の年始の会である。題は「梅有佳色」、そ

の後に当座の続歌を収める（出席者は同じ）。主催者は冒頭に位置する「右大臣晴嗣」であるらしく、後に改名して近衛前久となる。本写本では天文二十三年（一五五四）正月の会であることまでしかわからないが、参加者山科言継の『言継卿記』により、二十日であったことが知られる（近衛家の会始は正月二十日が例であったらしい）。廷臣たちの他、連歌師の宗養や紹巴も末席に連なっているが、その中に「一千世丸」とあるのは里村昌叱の幼名である（この時十六歳）。これは現存する昌叱の最も早い作品であることが注目される。従来『言継卿記』により出席者の大略のみが判っていたが、田中本により全貌が明らかになった。新資料。

（一三六頁）

『目録』は「本写本では天文二十三年（一五五四）正月の会であることまでしかわからない」とする。厳密にいへばその通りだが、釈文にも示したやうに、端作題に「廿日」と（恐らく）同筆で補入されてゐる。ただ「廿日」は甚だ読みにくく、これを以て徴証とするのはやや躊躇されるが、念のために指摘しておく。

『川瀬目録』には「天文二十三年御会始　一冊96／室町末期写。山科家旧蔵と推せられる。表紙の墨書題は江戸末期筆。仮綴。判紙本」（五八頁）とある。

以下、関連する史料を摘記しておく。

◆廿日、辛酉、陰、八専、……○近衛殿御会始之間申刻参、先路次礼に罷向、……次近衛殿へ参、御人数大覚寺殿、右府、聖護院殿御児、新大納言、予、広橋中納言、永相朝臣、時秀朝臣、頼景朝臣、俊直朝臣、御侍衆十人計、里村一千代、宗養、連歌法師、紹巴同等也、御当座一首宛有之、次俊直朝臣御懐紙御当座読揚了、次御盃三献有之、音曲等有之、夜半許各同道退出了、懐紙、

春日同詠梅有佳色和歌　　按察使言継

やとに先待えし春のうれしさを色にも出てさける梅か香

御当座帰雁、

いかにせは引もとめまし梓弓帰るはおしき春の雁かね

（『言継卿記』）

◆十九日……御くわいはしめの御くわいしとも。いつものことくまいる。

（『お湯殿の上の日記』〔続群書類従完成会本による。以下同〕）

（武井和人）

4 天文廿四年御会

〔国立歴史民俗博物館蔵田中本『天文廿四年御会』（H－七四三－三三二）〕

天文二十四年御会（〔現〕外題）
天文廿四年御会（〔原〕外題）

甘露寺
経元
（貼紙）

（半面空白）」一

詠二首和歌（端作題）

山残雪

いつまてかかすめるかたの山たかみ　雪をけたしとさゆる朝かせ

寄松祝君

君は君とはかり代々の跡をしも　あかすも松にちきる言の葉

春日詠二首和歌

二品方仁親王

山残雪

日ののほる山のはよりも一むらの　かすめるかたにきゆるしら雪

寄松祝君

ともにへむ君か千とせの色そへて　春にいく度あひおひの松」二

春日詠二首和歌

式部卿邦輔親王

山残雪

消のこる雪をも花とみやま木の　梢つれなき春としもなし

寄松祝君

おさめしる御世を君か代と吹かせも　松にのとけき春はしるしも

詠二首和歌

沙門覚恕

山残雪

芳野山なをあり明のつれなくて　残るも深きこそのしら雪

寄松祝君

いまよりや齢を君にちきるらし　おなし砌の松のゆくすゑ」三

詠二首和歌

定円

山残雪

所から花にまかへて見よし野の　山さたかなる雪のむらきえ

寄松祝君

色かへぬまつをためしにかそへみん　君か老せぬ万代の春

春日同詠二首和歌

従一位藤原兼秀

山残雪

きえやらぬ山のはみえて春さむみ　雪よりあさき朝かすみかな

寄松祝君

ことし生の二葉のまつのかけたかく　つもらん春は君そかそへん」四

春日同詠二首和歌

権大納言藤原永家

山残雪

明ほのゝ空の匂ひにのこりてや　雪を花なる春のとを山

寄松祝君

陰たかきみさほの松のわかみとり　君かめくみの程をみすらむ

春日同詠二首和歌

権大納言藤原光康

山残雪

はるにはや心まとひのやまへ哉　花かあらぬか残るしらゆき

寄松祝君

かきりなき君かよはひにひかれつゝ　千とせの松も万代やへん」五

春日同詠二首和歌

権大納言藤原孝親

山残雪

春としもかすみそかぬるやまたかみ　またきえやらぬ雪のひかりに

寄松祝君

かそへつゝ松の千とせをわか君の　よはひなるへきかけの木たかさ

春日同詠二首和歌

権大納言藤原季遠

山残雪

よそはみな春日に消て比良の山　又めつらしきこそのふる雪

寄松祝君

生のほる松に小まつをうへそへて　つきぬ千とせも君かまに〳〵」六

春日同詠二首和歌

権大納言藤原国光

山残雪

やまはけさ又むらくにふりそめし　面かけ残るはるのしら雪

寄松祝君

ちきりをく君かよはひは久かたの　くもゐにたかき庭の松か枝

春日同詠二首和歌

按察使藤原言継

山残雪

春なから日のさすかたへかたわけて　残りのこらぬ雪の山かけ

寄松祝君

陰たかき松の葉数のかそふとも　限はしらし君か代のはる」七

春日同詠山残雪和歌

権中納言藤原為益

山残雪

深山きのこする゛もはるはゆきおちて　うつもれそむるたにのしたくさ

寄松祝君

をのつからまつをためしにひきくれは　久しきこゝろ君はしるらん

春日同詠二首和歌

左近衛大将藤原晴季

山残雪

春といへはつもりもあへす山の端に　ふるものこるも雪のむら〳〵

寄松祝君

いくかへり松の千とせのす゛かけて　我君か代を猶かそへみむ」八

春日同詠二首和歌

神祇伯雅業王

山残雪

としふかき山路の雪は春にたに　かすみの袖におほふとそ見ゆ

寄松祝君

百敷やみきりの松のふか緑　たちなれけりな君か世のはる

春日同詠二首和歌

参議右近衛権中将藤原公古

山残雪

むらくにかすむたえまは吉野山　きえのこる雪や花のおもかけ

寄松祝君

君か代はいくよろつ代もかはらしと　四方によはふる松風のこゑ」九

春日同詠二首和歌

蔵人頭右近衛権中将源重保

山残雪

きえのこる外山の雪は春てしも　わかぬはかりにさえかへる空

寄松祝君

わか君の千世を友とや生のほる　程は雲ゐのまつの木たかさ

春日同詠二首和歌

右衛門督藤原永相

山残雪

なへていま春とはいかゝ山深く　かすみかくれの雪のむらく

寄松祝君

行すゑのかきりをいはゝ弥たかき　松にそ君かよはひゝとしき」一〇

春日同詠二首和歌

左近衛権少将源邦富

山残雪

さえくしかせのなこりは春とたに　石木の山に残るしらゆき

寄松祝君

我きみのよはひは松の千とせとも　春に立そふみとりにそしる

春日同詠二首和歌

右兵衛佐藤原氏直

山残雪

けぬかうへにまた打ちるや日のゝほる　山としもなき松の雪かな

寄松祝君

こゝろにをまかせはてゝむ君かへん　よわひはちよの松のおひ末」一一

春日同詠二首和歌

蔵人右少辯藤原経光

山残雪

空さゆるとを山さくらさきぬへき　色をふかむる春のあは雪

寄松祝君

雲のうへに尽ぬ千とせの君か代を　松にさなからまなつるの声

春日同詠二首和歌

右衛門佐橘以清

山残雪

春にけさうらゝなるへき山かせの　かすみや消てのこるしら雪

寄松祝君

君にあふときはの松とちきりてや　いく万代のはるも限らし」一二

春日同詠二首和歌

蔵人中務大丞源為仲

山残雪

ときそとも雪には見えぬ吉野山　かすむや春の立となるらし

寄松祝君

かはらしと松のねさしをうつし栽て　すむてふ君か世をあふくらし

天文廿四年二月九日（中央やや右寄りに）」一三

（石澤一志）

【略解題】

底本の書誌に関して、『目録』に以下の記載を見る。

【数量】写本一冊

【装丁】紙縒仮綴
【表紙】後表紙、墨付に似た料紙、二七・〇×二〇・四
原表紙、共紙表紙
【外題】後表紙、打付、中央、墨筆「天文二十四年御会」
原表紙、打付、中央、墨書「天文廿四年御会」
【本文】八行　字高二三・五
【丁数】原共紙表紙共、墨付一三丁
【奥書等】一二丁「天文廿四年（一五五五）二月九日」
【備考】天文二十四年（一五五五）二月九日に後奈良天皇が催した宮中歌会。題は「山残雪・寄松祝君」の二題。冒頭の無署名の歌が天皇御製である。以下、親王・廷臣たちの歌を集成している。山科言継はこの歌会に出詠しており、その記録を残すために書写したものであろう。原表紙に「甘露寺経元」と墨書の紙片貼付。新資料。（一三七頁）

『川瀬目録』には「天文二十四年御会　一冊96／天文二十四年山科言継筆。表紙の題は江戸末期写。美濃本」（五七頁）とある。このやうに、両目録とも言継筆と見てゐる。言継自筆の家集である阪本龍門文庫蔵『拾翠愚草抄』、国立歴史民俗博物館蔵田中本『台月和歌集』の筆跡と比ぶるに、言継筆と見做して良いやうに思ふ。なほ、貼紙に見える「甘露寺経元」は、本歌会に出詠してゐるが、底本との関係は未勘。

本歌会は、『公宴続歌』に未収であり、他に伝本の存するを知らぬ孤本である。また、『続史愚抄』にも記載がない。

以下、関連する史料を摘記しておく。

◆七日、癸酉、天晴、七月節、〇広橋亜相被立寄、明後日禁裏へ御盃令沙汰之間必可祗候、又二首懐紙可為持参、題山残雪、寄松祝君之由被示了、

（『言継卿記』〔続群書類従完成会本による。以下同〕）

〇

九日、乙亥、陰、……〇未下刻参内、予和歌今朝称名院へ罷向談合、則令清書、

春日同詠二首和歌

按察使藤原言継二行七字如常、

山残雪　寄松祝君

春なから日のさすかたへかた分て残り残らぬ雪の山かけ

陰たかき松の葉数のかそふともかきりはしらし君か代の春

親王御方御懐紙計被進、御不参也、被参之輩式部卿宮、曼殊院宮、広橋一位、中山大納言、四辻大納言、広橋大納言、予、冷泉中納言、右大将、伯二位、公古朝臣（新宰相中将）、重保朝臣、永相朝臣、邦富朝臣、氏直朝臣、経元、以清、源為仲等也、先於御三間公卿各参、重保朝臣読上之、次御盃参、各番衆所簾外に、祗候、黒戸之跡舞台被敷之、伊勢守淵田三郎左衛門尉父子、河村民部、窪紀介、其外沢路藤次郎、窪新右衛門尉、同弟市右衛門、地下人両人鼓大小、太鼓、狂言、以下十六人歟参、小うたひ其外七番狂言等有之、御盃数献参了、予夜半計早出了、酉下刻於男末各小漬了、御陪膳右大将、両宮陪膳永相朝臣、邦富朝臣、以清等沙汰之、女中衆無御出、於御学問所大祥寺殿、岡殿、安禅寺殿、女中各御見物也、

◆九日。ひろはし大納言申さたにて。かねてより御たいいてゝ。二しゆの御くわいしふしみ殿。たけのうちとの。う大しやう。みなみなおとこたちちさんにて。かうし頭中将。かうしはてゝ。御庭

にてふちたうたはせたるる。御さか月七こんまいる。そのほかおさへ物三。御おり五かう。御さか月のたい。御たる十かまいりて。御ひし〳〵と御きけんよくいらせおはしましてめてたし〳〵。

（『お湯殿の上の日記』）

（武井和人）